

山下栄一編著

## 『現代教育と発達幻想』

(明石書店、1988年1月刊、2,400円)

本書の成り立ちについてつぎのように記されている。「この書物の内容の土台と成ったのは、数年前から、関西大学の山下研究室に集まってきた数人のメンバーで、『発達と教育』という主題をめぐってかわしてきた自由な討論である」(まえがき)。

書名からうかがえるように、主題は「発達幻想」批判であり、より正確に言えば「発達論の乗り超え」がその基本課題に据えられている。周知のように、1977年に山下恒男氏の『反発達論』がそれまでの発達信仰とでもいえる問題状況にイデオロギー批判として斬りこんで、多数の人びとに読まれて受容されていった経緯がある。その清新で<常識>を打ちくだく論法は、1979年の養護学校義務制度化を直前にした反対運動の側にひとつの「思想的」論拠をあたえたといういきさつがある。それ以後10年が経過し、「義務化」の「定着」と「義務化体制」へのくりかえされる「執拗な異議」とが今日の状況を制している。「客観的にみれば「発達」という社会観念は依然として強固なままであるというよい。

本書は当然こうした事態を見据えている。「発達という近代社会の基軸となってきた概念の幻想性を明らかにしていくことを通して、近代的な教育の理念そのものを超えた新たな地平を展望していくことが、被差別民衆の側から、教育に関わる問題状況を変革していくために、いま求められているのだと考える」(山下)と記されている。

ここで本書の構成を紹介しておこう。第一部「発達と教育」の成立と展開、第二部・現代教育

と発達幻想、第三部「共生の思想」を求めて、となっており、全九章の構成である。執筆者は、編者の他、堀正嗣、中城進、平山美千代の各氏である。第一、第二部は主題をめぐる諸問題の概括と争点の問題整理といった趣きがあるのに対して、第三部は、「生活者の立場から」(平山)の問題提起を受けて、〈共生〉の思想に向かうという方法がとられている。前者については、よくまとめられており、後者については、その〈方法〉が十分いかしきれないままになっているように思われる。それは本書を通読、再読して感じたことであるが、問題の歴史的素描、あるいは「概説」的部分が基調になっているからであろう。むしろ、個々の問題の掘り下げが必要なのではないか。しかし、以上のような点をのぞけば、本書が課題とした「発達幻想」批判をめぐる論陣に肯づくことが多かった。

たとえば、「発達概念においては、階級性や帰層集団やその固有の文化などの個々人の社会的な規定性は一切捨象されている」(232ページ)という指摘は、いまいっそう深化されるべき課題であり、的を射ている。あるいは「子どもの見方としての発達という概念の一つの大きな問題点は、子どもというものを、その具体的状況から切り離れた形で捉えてしまうところにある」(248ページ)。これも核心を突いている。〈共生〉の思想を追求するための著者たちのこうした格闘に読者は共感を覚えるに相違ない。教育学と心理学の共同作業の一里塚として本書が読まれてほしいと思う。

(岡村 達雄)